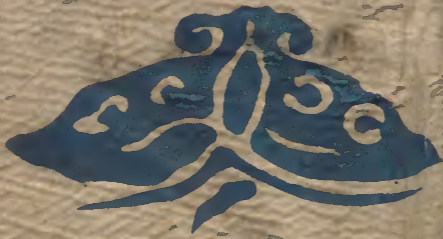


志海全



和書門			
類	號	函	架
〇	〇	一	一
〇	〇	一	一

和書			
類	號	冊	架
〇	〇	一	一
〇	〇	一	一

(九十和)

内閣文庫			
番號	和 28420		
冊數	100 ( 19 )		
函號	211	300	





明治十二年  
購求



塩志里卷之十九 宝永

先考忌祭之祭文

形より製せし字

尾府東照宮祭礼歌集

お國寺の中心

加藤忠廣の詩

珊瑚瑪瑙の枕説

左神を鶴を供せし事

瘡痕を拓く方

月を詠む詞 兼 詩句

葦吊の舟

米

類聚神祇本源

古仙多古事記云

室水禁裏法塔歌

古玉の巻

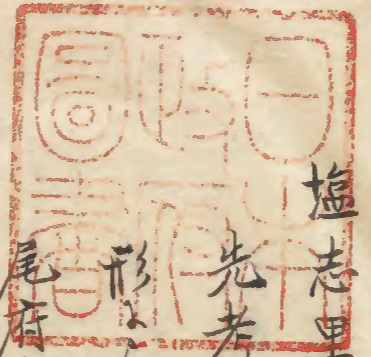
白石英

甲陽軍記の非

日時古函

護法考卷秘

尾濃清右の法



紀姓堀田系圖

長坂血槍丸の跡

劉根傳云鏡

神子

三所康系城取

列子云死生逆反

吉川子吉川の祖先

又昭道小童送行の詩

男子作過

我國の事始

兵主考

法系姓平野系圖

法系系圖撰奉行人

系法性寺

古坂大堂

新館をわくく平家侍人

葬事

世よりりり所史軍記の條

志慕の詩

大坂役毎日各糧石數

天皇の條

婦孺のり大徳る小出幸

河野家系出之島神

室永在粉州山崎出の事

○先考忌祭之祭文

維

宝永三年歲次鼈生仲呂上弦扶嚮孤子信景  
謹以薄微之奠俛而奉醑之嗚呼哀哉寒去暑  
未烏鬼寢踈庭草代綠既二十有三祀追遠感  
時昊天無極花落水流江山新恨鬱々臺雲未  
見一鶴之皈而陰々曉林更添群鴉之泣而已  
執秃筆袖淚轉盈嗚呼  
神昭鑑孤子中忱嗚呼哀哉尚饗

拈瓣香曰

殘睡一場夢

往塵子里雲



之處御書寫可點進彼書寫御本之由被仰下之間披見之處被貽此與書了彼詞云

丁巳秋九月於勢州宿館外官三祢冝家行神主本手書之此抄十五卷先以寫畢於當卷者依秘中秘為別卷奏覽之時猶留之適經田當國之間為結縁聽一見之由所相談也因密寫留更不可他見矣

以此見之則神鏡篇蓋此書末篇欽實彼一篇二所御内院御灵形等悉載之讀之則立毛末學莫不敬而誦去焉

○府城 東照宮舞樂自敬公在世之時大槩定之

四月十六日

平調 ヒラテウ 五常樂 音樂

大食調 ダイシツテウ

拾翠樂 シツソウ 音樂

拵振 セウビン 笛鼓計

太平樂 有舞

高瀬音取 タカノセ

拍拵 ウチコ 有舞

陵王 リョウオウ 前乱序笛鼓計 有舞

納蘇利 ナツリ 有舞

長慶子 チヤウケイ 音樂

每年如此然 誠公請 朝家樂官使傳秘曲於我伶人自此還城樂五常樂散手破陣樂打毬賀殿林訶等新舞之 同十七日朝音樂

平調音取

五常樂

太平樂

長慶子

神行音樂

慶雲樂

頤宮音樂

千返樂

夜半樂

賀殿

還御音樂

千秋樂

還城樂

○ 士仏伊勢と赤流のたけと云本海盤の白とを以て男ハ冠  
をむすひ掛帯の赤をうつく女ハたかき此則陽を

ををぬくををほり陰ハ火をぬくををほむををぬく  
信景拙し世事客ありと看とまかしく及おりの小  
戸の身更ハ水をぬく満溢しほむり此山史九十四  
我國風俗の事をききりて婦人夫家必先踏  
火而身夫相見とらておむむしハのこを有らん  
風うりつ俗更しと世多のしり今ハまきまやらん  
のいよくまつとく一筆のこ一筆のこハ目れた  
くくく婚禮の時お輿の傍ま家の門へて庭燎を  
設く俗云まのつりい一掃くまらとを好く身有く葬時  
つりく燎火をほくくあくく古人の火を踏く乃  
ゆをほりて出櫃の礼とあくくハ亦新婦まの



あるはるの先白を看し一庭空より銀ふ命ふ前  
赤衣を掲ぐるを危也といふ是ももも赤を以て  
清むりの言を小忌本御覧といふ一の男の彼時  
御掛帯にむし女のかけり也を制るに古家よりとて  
初之

- 永樂通宝錢、明の太宗永樂九年の滄初りといふ  
を文字に我國京師五國寺中亦名、仲芳、後山杉後鷹永  
の中明の使し書法才一の術を明人より後と描畫  
を以て永樂通宝の文字を事としむと今天下に  
傳ふ所の永樂通宝の古銭、中山の筆法なりたる  
○ 宝永三年乙酉二月十日、林裡法願一万石法増

附 法使大岡五郎右忠門

同三年丙戌正月廿八日院法所法願三万石法増附

法使畠山民部

- 加藤清政の嗣肥後守忠廣羽州庄内小浜庄に  
彼地を住しむるは

人間万事定不定 身似明星西亦東

三十一年如一夢 醒來庄内破房中

終る兼鷹二子此所より去りしより七年七歳と云  
あり

- 格古論曰古玉以青玉為上深綠色者佳淡者次  
之云々

○ 我國八坂瓊ヤサカニとくくは流蘇也古塚の井よりあり  
鉢擺ハツ婆福ハツ羅フ 珊瑚胡語 摩羅マ迦ラ隸キ 瑪瑙胡語

琉璃ハ深青の物をいふもの也魏畧格古論  
及ハ吳物志ハを按ルハ琉璃ハ雲母キのキ其色  
も白黄馬を縹縹紺紫小極とありんらんらん  
重積して風を折る爲して蟬の殻のカと  
とハ今ハ紺色の石といはるらん

○ 白石英 本草集解云大如指長二三寸六面如削白  
徹有光宗奭曰白石英六稜カ白色若水精云  
按すりハ本國赤山の石に生ずる水晶ハ白石英ハ  
一契家長坂氏の家蔵とある物をいふらん

六稜ト云ニ寸ありてむらり生ずる光瑩海澄  
磨りてくくくく水晶とて殺らん

亦黄石英赤石英青石英等ありと云

○ むらり太神高を彩を供せしや延喜を神子儀或ハ  
雞幾物雞卵黄丸と云ふ同らん

○ 甲陽軍記高坂氏自伝に云くは人馬を供して  
杜撰也幸也南紀大關定祐ハ川中島戦争ハ  
こまねと云

天文十六年二月少弐幼介信玄より大内義隆の  
滅亡を以て云

義隆其臣陶晴賢と殺せし事ハ天文九年九月

何と十六の前のまをさしらんや

筑摩川海和の時謙信自提原系時より降し給せ  
と云

謙信は平系弘の胤をたかりらんや

公方灵陽院義昭と云

義昭は其の長子八月襲して信長を奉まじり其  
母を公のくみりと二十餘年前何とけ信長を  
正しき

天文六の七月川越夜軍因十五の七月川越の城を  
小糸氏援けし軍遣二度の軍に一時は信長討終  
つたすらんらんそは代々月を考らんらん上杉

朝定松山の困よあつらん十の巻ありし按ずらん朝定

はと文十六の七月廿日川越と戦死す法名了念正栄上州海竜寺越後雲洞寺魁簿見

信玄氏康松山の城を圍しし永福寺也也之他は推  
ておしし杖拳ししあは及と無控譯者派甲陽軍

○瘧疾のありし日一時計前と大森根をすし湯子和

是をとりん湯にあつてらん湯にあつてらん湯にあつてらん湯にあつて

因りし夏の軍と馬と飼ふ大森者らん信と持水は  
必しとりて飼ふらん飼ふらん飼ふらん飼ふらん

大森根三四箇煮らん其の内と入しらん可なりとある  
老人らんらん

○ 通書肘後經及通書大全等之書謂「日時吉凶者多皆曆学之異端也」

○ 名と非ふと音の月々ありてむめり多かる梅なりと物に  
 ちんちんきてふぬ乃庭の井にこけいりてふ家屋に  
 ちんちん初冬のまなふとまてえあつたて思ひてま  
 りぬいり火むいりてまてえあつたて思ひてま  
 庭より霧ありてまてえあつたて思ひてま  
 木にまてえあつたて思ひてま  
 思ひてまてえあつたて思ひてま  
 うけいりてまてえあつたて思ひてま  
 かけいりてまてえあつたて思ひてま

とてまてえあつたて思ひてま

月下閑顔幽徑晚 林杪鶻雛翠烟寒  
 秋筵暫伴碧香暖 雲袖一懷白扇圓  
 茅舍霧消影蕭々 竹籬風互露珊珊  
 遇君更記古詩字 相見時難別亦難

いづちあつたて思ひてま  
 ぼりぬあつたて思ひてま  
 幾ゆあつたて思ひてま  
 ほりぬあつたて思ひてま  
 月もあつたて思ひてま

二つあり母はかゝぬものまゝにして

かゝりて月を大し〜にせしむる

○護法常應錄三十三卷

禪錄也

仙洞御製序題号

亦勅賜也此書左少將源吉保

柳沢

撰集丙戌

初夏騰寫凡大部

一部禁裏

一部輪王寺宮

一部鎌倉五山中

一部東都月桂寺

一部妙心寺

一部侍從吉里朝臣

吉保朝臣室

曾雖氏之女也

以古紙錄二卷為附録云々

○侍御史呂陶言明堂降赦臣僚稱賀訖西省官欲  
往奠司馬光是時程頤曰子於是日哭則不歌豈

可賀赦才了却往吊喪座客有難之曰子於此日  
哭則不歌即不言歌不哭今已賀赦了却往吊喪  
於礼無害蘓軾遂以鄙語戲程頤衆皆大笑結怨  
之端蓋自此始

又國忌行香伊川令供素饌蘓子瞻誥之程門  
朱於輩術之遂立敵矣

程頤在徑筵多用古礼蘇軾嫉其不近人情遂嫌  
隙於是洛黨程子蜀黨蘓軾朔黨劉摯等之語

或人曰一日〜て慈喜を〜らふ今人のたは  
〜程子の云は〜〜〜人信しを〜〜止好  
志〜〜有り〜〜孔文仲〜程子を證証〜



をかろきくあはれに亦彼能優くをき着  
 かりしは君子と小人の相違をた動もすれに  
 正りきとらへたるが持の徳なきぬ気の毒あり  
 君子の礼ありをきくは小人の毒也朱公控名の控書  
 自教師をあをりし非ざるんく銜りたる九の事也  
 故に劉進之曰獲軾は忠をさうふ心あり自是あり  
 首とかりし人を攻撃せり着也とらへる各家のこと  
 報黨は自さりの兵法也故に應子の兵蜀忠を陳  
 を侵はる也とらへる程門の止むものを好むて忠  
 の名を慕はる相程子好むあはれ宋室の事なりとい  
 是も似て非也君子と小人を分けし立る事一四立の



君子を用ひりたる宋との通ちりてて下とのめき也  
 君子を能く治すありては官と治りて下を左右し  
 政をあらわして忠を治る事とてよく人を得しめ  
 心あり忠と放遠賤黜をせしめりてよく人を得しめ  
 しては福位もよくしりて程をすれ程子より亦  
 をきくは何の事か自ら好む事とて好む事とて好む事  
 人より好む事とて程門忠をさうふ事とて君子と  
 君子の友ありし事とて見せし忠の事とて侍る

○古自濃州至尾州路野上青野大墓赤坂 不破郡自  
 此越墨俣川出小熊古尾州庄名也羽栗加納古書蚊野  
州郡今濃 尾州 一宮日上 下津日上 萱津日上

今自<sub>二</sub>淡路赤坂<sub>一</sub>經墨侯至<sub>二</sub>須屋<sub>一</sub>越自此歷萩原  
稻葉清須出名古屋行<sub>二</sub>熱田<sub>一</sub>

○古尾州國衙今國府松下村  
自一宮赤方より増田赤坂右馬守  
より出て

壹津、以今山法衣及い古道の終増田の西南の方  
村の名しるるも昔の法衣より

一宮村の南し<sub>二</sub>冨氏兼松氏伴氏佐々氏<sub>一</sub>の古尾衣の  
迄あり一の宮の四家と  
いふことあり

○中島郡堀田村七ツ草村  
の南氷室村篠田村  
の北平野村國府官の  
坤の方

紀長谷旅以十三世左忠<sub>二</sub>後紀行義の子<sub>一</sub>從五位上  
尾張守紀之高始<sub>二</sub>尾州中法郡堀田村<sub>一</sub>住居是  
堀田氏のより祖より平野村<sub>一</sub>是より位下右京<sub>一</sub>を法

原枝<sub>二</sub>噴始<sub>一</sub>住せりより平野氏<sub>一</sub>と稱せり子孫  
海部郡津島村<sub>一</sub>住せりしと云

○紀姓堀田系圖

○孝元天皇——彦太忍信命——屋主忍武雄心命

武内宿禰生于紀伊<sub>一</sub>神天皇九年  
賜紀姓<sub>一</sub>齡三百八十才云々沐鬼宿禰執政<sub>一</sub>齡一百七十八才

真島宿禰号平群<sub>一</sub>大臣  
齡三百余才谷寢臣谷<sub>一</sub>茲  
又作<sub>一</sub>籍有咋臣一本咋ノ上ハ  
有<sub>一</sub>久比臣

小足臣——塩手臣推古朝——大口臣皇極朝

大人イカフト  
改宿禰賜朝臣正三位  
大納言始也益人田口姓祖  
一本無此人諸人光仁外祖  
贈太政大臣



磨

大納言  
文武朝

飯磨

鎮守府將軍  
本名奈良磨

宿奈磨

正三位  
桓武朝

古佐美

大納言

廣濱

肥後守  
平城朝

長江

式部太輔

魚粥

山城守  
魚一作兼

國守

典茶頭

扶範

彈正忠扶一貞

長谷雄

鴻儒号紀納言  
中納言從三位

濟光

參議從三位  
濟二隣

文利

紀伊守

忠道

紀伊守出雲守  
中納言從三位

家俊

紀伊守

宗信

彈正

宗雅

大藏太輔

定綱

宮内少輔  
一宗綱

俊文

紀伊守從四位下  
千載風雅作者

俊重

紀伊守

宗遠

阿波守

重滿

阿波守一本俊文  
重道重滿行義下云

行義

左工門督

行高

行一作之始移住尾張國中島郡堀田村尾張守從五位下  
母今川貞世弟蒲原氏兼女也

正恭

堀田弥五郎右工門佐從五位下貞觀四年正月於四奈原戰  
一作之恭於尾州津島立祖神武內之祠俗呼弥五郎殿

之盛

一作正盛修理大夫  
新統古今集作者

正重

尾張守宇津峯官方  
応永年移尾州津島村

正時

弥三郎

正綱

兵部太輔

正純

兵部太輔

女子

源良玉室良王宗良親王孫  
尹良王子也

正道

加賀守  
屬織田備後守信秀

正貞

孫右工門法名道悦  
守孫多矣

右尾州津島堀田氏系譜正恭之裔安當細見浦上等諸氏亦多矣

○ 清原姓平野系圖

○ 業忠

舍人親王十三世大外記清原賴業十一代孫少納言宗業子也始名良宣  
正三位主水頭宇津峯宮方志永中移入尾州津島後与宗賢入吉野  
歷年飯洛仕于北朝領尾州津島郡平野村

宗賢

正三位贈從二位  
船橋伏原祖

枝賢

平野右京進

國賢

少納言

秀賢

昇殿藏人  
子孫仕朝廷

宣賢

從二位環翠軒  
實ハ卜部兼傳子也

宗長

平野主水正實八尾州赤目城主  
横井越前守平政時子也

宗房

主水正母堀田修理大夫  
正盛女也

賢長

右京亮子孫仕北条家為駿州善等寺城主法名万久  
武勇之人也子孫改神田駿州修理亮等是也

宣政

新左卫門仕平信長公  
於本能寺戰死

業賢

主水正

兼右

為卜部兼滿之嗣左兵卫督從二位  
吉田相統萩原之祖

長治

平野甚右卫門仕平信長公  
為平野右京亮入道万久之嗣

長恭

平野權平從五位下遠江守武功之人也始仕  
豊臣秀吉公後奉仕神君及台徳公

長重

九右卫門

長勝

権平

右尾州津島平野氏家譜也右二姓系圖見寛永  
御撰諸家系圖及船橋家譜等及家傳系譜

○

長坂氏姓ハ与削平岩都筑ホリ因祖ヨリトシテ始メ

三州額田郡大林山位子長坂太刀帶ト稱セリトモ裔

長坂彦五郎信政 清康君ト仕テ武功を勵メテ

信を以テ主功を以テ血統トシテトシテ人稱セリ

法康君便七名を頒ひく血滄九郎と号ん 俗泰利九郎と号ん  
之子彦右即信宅 神君と傳く亦血滄九郎と号ん  
武勇父の弟と号ん 之子権七即信吉 右徳云ふ事  
仕人子彦右即忠高存る内には仕く 兼利九郎と  
稱し 次男一兵信吉、嗣とす 権七即と名づく亦  
尾府下奉仕の長坂氏もよく信政の裔也

○寛永十八年二月有 台命諸家系圖修撰

惣裁 太田備中守資宗

奉行 御書預り 星合伊左衛門具枝

三雲内記定氏

西尾加右衛門正信

關兵三郎正成

右四人十一月朔依命奉行之

林道春

此外儒臣數輩為執筆僧徒又出席

○劉根傳云人思形状可以長生用九寸明鏡照面  
孰視令自識己身形久則身神不散疾患不入云  
李時珍本草發明曰鏡乃金水之精内明外暗古  
鏡如古劍若有神明云々 本草細目八

淨て按す我皇太神忠臣之位とす 此の時  
鏡を清て水を愈こと水に身神をて 其を  
以て心為其魂の象も水より事起りたるを

考くまゝく其九寸の鏡をくわ我八咫の鏡は後方  
をくわくく作りや九古鏡の具矣有りて邪魅件  
息を辟け疫をくく病を照し吉兆を兆せしり  
新江編名史に樵牧り田談西京雜記酉陽雜俎  
松窓流宋史に仙術ありて固より妖  
妄の事多しとて後神具はくく  
博乃乃くく神書を海より人こくく  
説をも知在りたり

○系師法性寺の太政大臣後忠通を創るくく  
一寺也佐佐良の日記幸もくく  
くくくくくくくくくくくくくくく

たふくく仙像乃の事令い志福寺と遷せしもの  
多しとや香尾州中法那國衙の國々寺もこの  
時う意慮してせな説状をくく妙無淨寺乃有と  
たり作しん古今うくくくくくくく  
○世俗稱巫女為神子倭訓或人曰此美加武乎即  
語和畧言也

按楚辭雲中君朱註云天神所降也楚人名巫  
為灵子若曰神之子以此見之則美乎之称倭  
漢同其意美者尊稱倭云伊美齋之意而用御宇亦云  
美云遠武因举楚辭礼魂曰成礼兮會鼓傳  
世兮代舞注會鼓急疾擊鼓也世与范同巫所持草云神代  
卷上一書曰伊婁並尊云祭之神之魂者在時以花祭亦用  
鼓吹幡旗歌舞而祭矣是亦東西一教欽其巫所持之香草者  
古事紀所謂手草結也竹葉似之此亦我國招魂之時或降神

祭所為之也

○ 古渡犬堂の源起は犬寺の祀事を以て以後の事也  
 事は按て野田の神の圖階下黑白二犬を各く  
 二邊に之を海に中て野田に繫せしもの傳へ犬を以て  
 導く終てり矢を穿せし化人少を指しせし程を  
 建山の長持持の神と号して祀りし其始の形圖は  
 と奈家の傳てり大寺も其の宗たるに法を其為し  
 おとめ後と二犬を各くしりし後世その形を忘  
 せし幸念の法をなし丹治系圖と名内古印大山  
 作の義よりし其の法に中法法を尊く之野を圖  
 りむ依し丹生明神と祀りしありしなり

物持明神の格を附託するなり其の法は撰の武  
 家系圖よりしなり

○ 神君三州東條の城を按てありし時三州三印各東  
 康系を以て之を以てありしなり其の法は撰の武  
 家を獲てむらぬに必康系を以て其取しありし東條  
 の法吉例ありしなり其の法は撰の武家を獲てむらぬ  
 其の法は撰の武家を獲てむらぬ其の法は撰の武  
 首田解江勢が深田三州下田武州八王寺持州大板  
 西の丸等ありしなり其の法は撰の武家を獲てむらぬ  
 法撰の撰小なり

○ 世謂悪七兵衛景清頼朝をくかりしなり其の法は撰の武

佛修養の爲大庇の~~す~~て形く~~く~~と亦云眼小  
魚網を~~を~~處い盲人の形~~と~~なりて幕下を何~~り~~し~~て~~  
と

按東大寺~~と~~て大衆の如く~~く~~何~~り~~し~~て~~後~~に~~  
中~~に~~於~~て~~の~~り~~者也保曆間録を眼小~~あり~~し~~て~~  
上~~に~~総~~て~~印~~を~~各~~に~~出~~し~~尉~~を~~く~~く~~棟~~二~~艦~~二~~と~~し~~し~~の~~事~~一~~古~~き~~世~~と~~  
出~~り~~し~~て~~時~~に~~浮~~り~~し~~て~~て~~て~~流~~る~~る~~に~~せ~~し~~

○林類曰死之与生一往一反故死於是者安知不  
生於彼云々又安知吾今之死不愈昔之生乎云

列子上  
天瑞

死是生彼浮屠氏所謂輪回也是說元出於列

子疑浮屠之說取之以為已之事欵且周穆王  
篇所謂西極化人為奇術或上天而登天宮等  
說浮屠本之為天道之說仲尼篇所謂西方聖  
者是設西方淨土以為說根本欵

○既死豈在我哉焚之亦可也沉之亦可也瘞之亦  
可露之亦可衣薪而棄諸溝壑亦可衮衣練裳而  
納諸石椁亦可唯所遇焉列子上  
楊朱篇

是浮屠謂火葬土葬野葬林葬等全同浮屠之  
說皆中國異端陳言而不胡竺之事欵亦放生  
之說出說符論不浮屠始言夫列莊之書謂生  
死而不止是知彼有死生之惑浮屠於謂之者

多に迷之尤甚者以之可知也

○ 蕨州の吉川氏ハ工藤祐隆の裔小早川氏ハ土肥実平  
の末也然るも小早川中務少輔治平子也一毛利元就  
の二男又四郎隆景を以て子一人也小早川権中納言  
治平子也一太刀元正也一盲人也一  
中西忠也也一州厄子也の麾下也

○ 或人曰以日野史軍記の語ハ之を以て其の如く  
其の書林秘本として之を衞ハ之を以て其の如く  
いふより也一其の如く之を以て其の如く  
亦之を以て其の如く之を以て其の如く  
書を以て其の如く之を以て其の如く

以て授けしもの少く一亦始終を其の如く  
其の如く之を以て其の如く之を以て其の如く  
其の如く之を以て其の如く之を以て其の如く

○ 文明の比もやある人他は之を以て其の如く  
其の如く之を以て其の如く之を以て其の如く  
其の如く之を以て其の如く之を以て其の如く

君去往他郷 吾今卧病床

訃音如落耳 莫惜一秋香

此もんのいふものも中も信を以て其の如く  
其の如く之を以て其の如く之を以て其の如く  
其の如く之を以て其の如く之を以て其の如く  
此もんのいふものも中も信を以て其の如く

○

相送相迎月下河

一朝恨是一宵恩

春風立尽绿苔路

幾拂落花看履痕

右を僧の核川に依也

不意獨窓殘夜夢

佳君同宿解愁情

覺來枕上無人語

只扣曉天鐘一聲

こゝの僧の義堂の詩なりと云ふや雪山原の夢中携手

欲相語破曉風驚亦斷腸と作りし増する姿も

よし一凡志慕の詩に家國の人あつても作の傍りあや

和寄して情を述るる有るなりと唐人の情海を

倚り何程多から窓殘夜月之何處簾捲東風燕復

来と作りし後の終る情遠信無憑雁北還東風

吹恨滿春山とも関到東花亦一年不成佳夢只

孤眠と云ふいひいあぐれつゝを詠せし句也

支願幾度綉停針秋入天涯恨轉深と補せし物

也一姿らん夕地と云ふ凡詩寄の情たるは詠の

公胸の思ひを傳へ侍りし我ハまの祈詠なり今

絶せぬいしめと持道詠る字いしんや

○

男子作過房事大多精氣耗脱死於婦人身上者

真偽不可不察真則陽不衰偽則痿者

世寃録ト云ふ一國に吏と人若かり年を却

りては奸婦のめく欺とて寃死を解り能く

世毎く世の事とて人の上と云ふ民との





城上郡穴師坐兵主神社上載大神大物主下  
載卷向坐若御魂同事紀素盞鳥尊乞食物於  
大御食都姬神大倭本紀紀日本云御食津神  
今穴師社所坐抄旧事紀文以素盞鳥御食津  
神祠一山西地欽是一同郡穴師大兵主神社  
稔代神社稔代食神也是亦意同上兵主神非  
八千矛神可以見是二近江國野洲郡兵主神  
社今俗訛兵主云閑曾村天王世以素盞鳥稱  
午頭天王於今土民之所傳來可亦證焉是三  
播磨國飾磨郡射楯兵主神社二坐今廣峯社  
在饒磨郡是乎諸記云山城祇園社元自廣峯

所移也射楯者素盞鳥尊子五十猛神与射楯  
言相涉是四壹岐島壹岐郡住吉神社兵主神  
社旧事記云詔素盞鳥尊者所知海原矣詔寄  
賜矣今列海神則兵主神者素盞鳥尊也明矣  
是五

右者度會延經神主の考也

○房州銜山の町々奇麗なる葦原ありけり此來の  
かこより其延經河々々々ありけり此來の  
絶る所ありて有他の町人なほ信ふる下世は此來  
を信心しといふもあまの言へりけり延經河々々々  
勅り乞ふにけり此來の言へりけり此來の言へりけり

さる食の初極を此女来しきりては縁の片終  
夜食のしきりてはあがりたに縁敷きくわたり  
いせりて既と二重あすりぬ或時け女日言沙  
こく縁を揺りぬ灯もちてくかりしころ  
度と縁の舟より火燈くしころ女をききむ  
とそれ消てけみ揺りてけりては女をききむ  
あくあがりて既と二重あすりぬ或時け女日言沙  
けりては縁の舟より火燈くしころ女をききむ  
怪たりいしと既と二重あすりぬ或時け女日言沙  
女はこきりては縁の舟より火燈くしころ女をききむ  
たりては縁の舟より火燈くしころ女をききむ

満く清りけ女富貴の妻となりては縁の片終  
信心せしころは法を愛せしけりては縁の片終  
たりては縁の舟より火燈くしころ女をききむ  
十里二十里をこきりては縁の舟より火燈くしころ女をききむ  
なはる業作ぬまの板なりては縁の舟より火燈くしころ女をききむ  
誠とてしきりては縁の舟より火燈くしころ女をききむ

代醉篇王行甫云家兄嘉甫ク衣を解ハたこ火星  
勢らいつる亦以を揺りて縁敷の中より具堂流落  
こよ陽氣茂職職の強也を徴ありて命長き徴也  
右も或人のものしきりては縁の舟より火燈くしころ女をききむ  
星も亦おの疾くして伊餘ありて縁敷の片終

のりゆを以て世を迷はすものあり也

○河野家系圖を以て

○品 孝靈天皇

彦狹嶋命

第四ノ皇子  
号伊豫親王

一御子

大宅姓

從一位諸山積神社

三島大明神是也

二御子

三宅姓

児島氏ノ祖

小千御子

河野氏ノ祖

按此系圖大宅姓祖以三島神夫伊予三島神

ハ大山祇命ニシテ元韓ヨリ降臨ノ由秋日本紀

ニミヘタリ今孝灵帝孫ヲ以テ三島ノ神トスルコト

盖シ三島別宮欽神号モ亦諸山積命ト号ス書メ以

テ疑ヲ傳フ

○室形三ノ内戌十一月二日夜丑刻磐州山田の中流カ

出火山田中ニシテ大荒失岡者ナリ赤尾社殿乃ト

シテ火燭ト三日の申刻ニ身ヲ神ト云恙ナクワリテ

カ小月濱及大間國生の社ヲ造リテ赤尾社殿ト

ニシテ赤尾社ニシテトナリテカト云云云云云云云云

垣三位の銘を始々格の福延木の赤尾社殿ト云云

伊豆廣野町瀬波垣外赤尾山の事カ赤尾社ト云



